

## 季吟『假名列女傳』小考

——誤訳・解釈・創作——

熊 慧 蘇

『假名列女傳』は北村季吟が明暦元年（一六五五）に西漢劉向の『古列女傳』を翻訳した作品で、承応二年（一六五三）に刊行された和刻本『劉向列女傳』をもとに翻訳したものである。<sup>（注1）</sup>すでに指摘されているように、原本最初にある四つの序文と各篇にある「頌」がすべて省略され、全八巻各篇の本文のみ訳されている。<sup>（注2）</sup>それはまた、意識と直訳を綯い交ぜ、本文の省略もしくは付加も行っている。訳文は和文体を中心とし、書き下し文体も混用している。<sup>（注3）</sup>

周知の通り、和刻本は中国の書籍を日本で刊行したものである。句読点や返り点・送り仮名などを付されるものもある。『劉向列女傳』は句読点がないものの、返り点や送り仮名・傍訓などが付いている。訓点を施した人は定かでないが、第一の翻訳者であるといえよう。しかし、第一翻訳者が原作に訓点だけを付けるのに対し、季吟は付加や省略を行いながら翻訳している。和刻本を基にしながらも訳文は必ずしもその訓点に従っておらず、自己流の解釈も見られる。また本来なら、「まんなの文字なれば、めのわらハの、たくひ、をのかし、よミとく事、あたハ」なため、わざわざ「いやしきことはに、やハラけつ、」「かんなに、かきけかし」たのだから、<sup>（注4）</sup>難しい漢語はないはずである。だが、それもところどころに残っている。その上、漢語を和語に「やハラけ」ととき、意味のずれや誤訳が発生することもある。

これまで、季吟の翻訳については、「『列女伝』を極めて精確に、しかも豊かな文藻をもって邦語訳し」、「原文に不明・難解な箇所」を読者に感じさせず、「巧妙な要約和解本」であるといった賞賛が多かった。<sup>(注5)</sup>確かにその通りであるが、誤訳についての指摘は殆ど見られない。もちろん、翻訳には誤訳がつきものである。ここで敢えて誤訳を取り上げるのは、和刻本との関連を指摘する一方、季吟の漢文力と日中文化の異同が根底にあることを問題としたいからである。

本稿では、『假名列女傳』と原作『古列女傳』の意味の異なる部分を取り上げ、誤訳と思われる部分と、解釈の相異および翻訳による創作と考えられる部分に注目する。『假名列女傳』を和刻本『劉向列女傳』と比較し、まず誤訳の原因の一部は和刻本にあることを明らかにしたい。そして和刻本の訓点に従わず、原作の意味と異なる箇所については、そうなる原因を検討する。その一因は漢文に和文にない言葉があり、訓点は付けられるが、翻訳が不可能な場合があるからである。また、わかりやすさや物語の面白さへの追求も、原因の一つである。最後にこれらを踏まえて日中文化の視点から論じたい。なお本稿において原作とは、漢籍の『古列女傳』を指し、原本は和刻本の『劉向列女傳』を指す。

### 誤訳と和刻本

まずは原本の訓点に従い、誤訳となった用例からその原因を分析していきたい。

『古列女傳』卷之一母儀傳十二「魯之母師」の本文末に、以下のような一文がある。（句読点と訳は稿者が付けたものである。以下同。）

大夫美之、言于穆公。賜母尊號曰母師、使明請夫人、夫人諸姬皆師之。（大夫はこれを褒め、穆公に申し上げる。穆公は母に母師という尊號を賜い、朝になって夫人に拝謁させ、夫人・諸姬はみな彼女を師とする。）

この話の母師は魯国の九人の息子を持つ母親である。正月の準備のため両親の手伝いをしようと実家に戻る。夕方に帰ってくると息子達に約束したが、空が曇って時間がはつきりわからないため、その前に帰って来た。彼女は門の外に止まり、

暗くなつてから家に入った。それを見た大夫は不思議に思い、彼女を呼び出して訳を聞いたところ、それは万が一酒を飲み過ぎて失態を演じているかもしれない子供達への心配りであることがわかった。大夫はこれを大いに称賛し、穆公に報告した。穆公は彼女に「母師」という尊号を賜り、夫人に拝謁させた。夫人や妾らは皆彼女を師とする。

では、この箇所のと刻本と季吟の訳はどうであろう。

和刻本 大<sup>ダイ</sup>夫<sup>フ</sup>美<sup>ミ</sup>之<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>穆<sup>モ</sup>公<sup>コウ</sup>賜<sup>タガハサ</sup>母<sup>ハハ</sup>尊<sup>ソウ</sup>號<sup>ゴウ</sup>曰<sup>ク</sup>母<sup>ハハ</sup>師<sup>シ</sup>使<sup>シ</sup>明<sup>メイ</sup>請<sup>セイ</sup>夫<sup>フ</sup>人<sup>ニ</sup>諸<sup>シヨ</sup>姫<sup>キ</sup>皆<sup>ナ</sup>師<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>

季吟 大夫、其心しらひを、いミじ、と、思ひやりて。穆公に、申あげつゝ。母に、たまものし。猶、たうとミて。母師、

と、名づけて。夫人や、姫ぎミなどの、師徳と請じ侍けり

「使明請夫人」の一句を省略した以外、季吟の訳は和刻本の訓読の意味と大きな相違がない。和刻本の網掛け部分をその訓点に従つて読み下すと、「母に賜ものす。尊號して母師と曰ふ」の二句となる。季吟の訳もそれに従い、母に「賜物する」と「母師と名づける」の二つの事柄として解釈している。しかし原文の「賜<sup>ニ</sup>母<sup>ニ</sup>尊<sup>ニ</sup>號<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>母<sup>ニ</sup>師<sup>ト</sup>」は一句で、母に「母師」という尊号を賜わるだけの意味しかない。和刻本の訓点が間違っているため、それに従つた季吟の訳も同様に間違っている。ここは和刻本の訓点の誤りによる誤訳である。

その後ろの「使明請夫人」を読み下すと、「夫人に明請せしむ」となる。「明請」は「朝になつて拝謁する」という意味だが、これを一つの単語として扱っているため、解釈しにくくなっている。もともと中国語でもいささか通じにくい表現であるため、中国の諸本中にも「明請」を「朝謁」に校訂したものがあ<sup>(注7)</sup>る。季吟も解釈に苦しんで、いつそないほうがわかりやすいとも思つたのか、この一句を省いた。

また、和刻本に「諸姫」としているのを、季吟は「姫ぎミなど」と訳している。古代中国で「姫」というのは、主に婦人の美称あるいは、妾を指す言葉であり、年齢の制限はない。本話では「諸姫」は、穆公の夫人以外の妾達を指すと考えられる。<sup>(注8)</sup>一方和語の「姫君」は、主に身分の高い親の娘を指す言葉であり、若い女性に使われる傾向がある。季吟は主人公の

母が「母師」と称されるため、穆公の夫人と娘達の師になることと解釈して、「諸姫」を「姫ぎミなど」としたのであろう。ここは誤訳というより、日中の異なる言語文化のコードから生じた相違といつてよからう。

『古列女傳』卷之三仁智傳十「晋羊叔姬」は、羊舌子の妻叔姬が一門を守り抜こうとして、夫を諫め、子を諭すなど努力する内容の話である。話の半ばに叔姬の息子叔向が、有名な美人夏姬の娘を妻にしようとするエピソードがある。叔姬はこのことに反対し、自分の一族の娘を嫁にしたい。その理由として「奇福ある者は、必ず奇禍がある。そして甚だしく美しい者は、必ず甚だしい悪がある」と述べ、玄妻という美女を娶って跡継ぎが絶たれた楽正夔の例を挙げた。玄妻は、「髪黒而甚美、光可監人（髪が黒く甚だ美しいので、光が人を照らすぐらいである）」とあり、「名曰玄妻（名は玄妻という）」のである。ここの「光可監人」は慣用句であり、「監」は「鑑」に通ずる動詞で「照らす」の意味である。『大漢和辭典』は卷十一の「鑑」の条に、「㊦てる。てらす」と解釈し、「左氏、昭、二十八」昔有仍氏生女、黥黒而甚美、光可<sub>レ</sub>以鑑<sub>レ</sub>。〔注〕髪膚光色、可<sub>二</sub>以照<sub>レ</sub>人。」としている。

和刻本はこの箇所のように訓点を付けている。

昔有<sub>シ</sub>仍<sub>レ</sub>氏生<sub>レ</sub>女<sub>ヲ</sub>髪<sub>ヲ</sub>黒<sub>ク</sub>而<sub>レ</sub>甚<sub>ク</sub>美<sub>シ</sub>光<sub>ヲ</sub>可<sub>シ</sub>監<sub>レ</sub>人<sub>ノ</sub>名<sub>ヲ</sub>曰<sub>フ</sub>玄<sub>ニ</sub>妻<sub>ト</sub>

傍線部の訓点が間違っている。この文において本来動詞格の「監」に「カ、ミ」と振り仮名をし、名詞格の意味ととっている。そのため、慣用句の「光可監人」をくずし、「人」は後ろの句「名曰玄妻」に関わってくる。この誤訓は漢語の品詞を誤った例である。一方、季吟の訳を見ると、

むかし、有仍氏の、うめる、むすめ。かミ、いとくろく、めでたくして。つや、かなること、かミミのことし。されば、世人、玄妻と、なづけたりしを。

となっており、和刻本の訓に従っていることは明らかであろう。「可監」を「かミミのことし」と書き下し、動詞である「監（てらす）」を名詞の「監（かがみ）」にしてある。ここも和刻本に従う誤訳である。

『古列女傳』卷之五節義傳八「齊義繼母」は義繼母が自分の子を犠牲にして、繼子を助けようとする話である。路上の争いで人が殺されてしまった。その傍らに兄弟がおり、検問されると互いに自分は犯人だと言い張る。一年経っても真犯人がわからず、とうとう王の裁決を仰ぐことになった。殺人罪を犯したのは兄弟のうちの一人。もし二人とも死罪にしたら、罪のない一人を殺すことになる。が、二人とも釈放したら、罪の有る一人を赦すことになる。宣王も手を焼き、「今皆赦之、是縱有罪也。皆殺之、是誅無辜也（今、皆これを赦せば、これ有罪を縱すなり。皆これを殺せば、これ無辜を誅するなり）」と悩む。ここを和刻本は次のように解釈している。

今皆赦之是縱有罪也皆殺之是誅無辜也

前の句は原作の意味と全く異なっている。「縦」の解釈が間違っているからである。「縦」は「たとえ」の意味もあるが、ここでは「ゆるす」の意味に使われている。「（今）皆赦之、是縱有罪也。皆殺之、是誅無辜也」が対句であるため、「赦之殺之」「縦之誅之」「有罪之無辜」はみな同じ品詞でなければならない。「縦」は「誅する」と対になり、「ゆるす」と解釈すべきである。季吟はこの文を「いま、ミナ、これを、ゆるせよ。これら、たとひ、つミありと、いふとも。ふたり、ころさば。つみなきを誅する也」と、和刻本の誤訓を踏襲している。

『古列女傳』卷之四貞順傳六「齊孝孟姫」は、齊孝公の夫人孟姫が礼を守る話である。その後半、孟姫が齊孝公と共に琅邪へ出掛ける途中、孟姫の乗る車が壊れたため、齊孝公は使者を使わして別の車で迎えさせる。孟姫は迎えの車が身分に合わず礼に合わないからとそれに乗ることを拒否し、自殺を宣言する。孝公は慌てて礼に適う車を出し、孟姫はそれに乗って帰った。このくだりのやりとりは、和刻本と季吟の訳では次のようになっている。

和刻本 孝公使駟馬立車載姫以歸姫使侍御者舒帷以自障蔽而使傅母應使者曰妾聞妃后踰闕必乘安車輜輶下堂則從傅母保阿進退則鳴玉環佩內飾則結紉縹繆野處則帷裳擁蔽所以正心一意自斂制也今立車無輶非所敢受命也野處無衛非所敢

久居也三者失禮多矣夫無禮而生不若早死一使者馳以告公更取安車二比其反也則自經矣傳母救之不絕傳母曰使者至輜輶已具三姬氏蘇然後乘而歸四

## 季吟

孝公、いそぎ、よつのむまに、車をかけて。孟姫を、のせ玉はん、と、し玉へりけるに。孟姫、とばりを、へだて、。其傳母を、もて。公の、つかひに、こたへしめて、いふやう。やつかれ、きく、妃后。とききミを、こゆるときハ、かならず、安車輜輶にのる。堂をおる、ときハ。傳母保阿を、したがふ。進退するときハ、たまのおものを、ならす。内飾にハ、結紵けつそまとひ、めぐらし。野處やしよにハ、帷裳いしやう、ふたぎ、おほへり。これ、心を、たゞしうし。こゝろバセを、一つにし。ミづから、おさめ、せいする、ゆへん也。しかるに、今、くるまを、たて、、輶へんなけれバ、命を、きくべきに、あらず。野處やしよに、衛ゑいなし。あへて、久しく、をるところに、あらず。かく、礼を、うしなひつゝ。ながらへんハ。はやく、死なんにハ、しかじと、いはせけれバ。使、をどろきつゝ。いそぎ、はしりかへりて。孝公に、しかくと、つげて。さらに、安車を、めぐらし出たり。その使の、いにし跡に。孟姫、すでに、ミづから、くびれて。死なんとす。傳母、これを、すくひ、とゞめて。とかく、いひ慰る程に。又、使、きたりつゝ、輜輶、そなはりけれバ、孟姫も、生出つゝ、乗て歸りぬ

季吟の訳はわかりやすい。しかも人物像がいきいきしている。少し手を加えてはあるが、意味は変えていない。孟姫の発言はほぼ和刻本の書下しである。ただ、文中二カ所の「立車」の訳が気になる。「立車」とは、古代中国の乗用車の一種で、文字通り立ったまま乗る男性用車のことを指し、固有名詞である。それに対して「安車」は座つて乗る女性の車である。同じく「輜輶」は、「前後に屏障ある車。婦人の乗物。」「王先謙疏證補」字林曰、輶車有三衣蔽無後轅、其有後轅者謂之輜、孫詒讓曰、邸及軺之借字、即所謂後轅、凡輜車後開戸、故有後轅、輶車四面屏蔽、則無後轅」（『大漢和辭典』）である。ただ、「立車」を動詞とすることもできる。『大漢和辭典』に挙げてある『史記』范雎傳「有傾、穰侯果至、勞王稽、因立車而語」の一文中の「立車」は、「車を停める」という意味で動詞である。本話原作にある「駟馬立車」「立車無輶」の「立

車」は、話の内容からして「四頭の馬が引く立車」と「立車駟なし」の意味で、ともに車の種類を指す名詞である。和刻本の訓を見ると、いずれも動詞の「立<sup>レ</sup>車<sup>ヲ</sup>」にしており、間違っている。季吟は最初の「使<sup>下</sup>駟<sup>一</sup>馬<sup>ヲ</sup>立<sup>レ</sup>車<sup>ヲ</sup>」を「よつのむまに、車をかけて」のように、「立車」を「車をかけて」と訳す。また、次の「立<sup>レ</sup>車<sup>ヲ</sup>無<sup>シ</sup>駟<sup>ナシ</sup>」を「くるまを、たて、駟<sup>へん</sup>なけれバ」と書下し、「立車」を「くるまを、たて、」と訳す。ともに和刻本に従い、動詞としてしているのである。「晋羊叔姬」の例と同様に品詞を間違えての誤訳である。

和刻本の訓点に従う誤訳は他にもある。『古列女傳』卷之七孽嬖傳八「魯宣繆姜」に「許殺仲孫蔑、以魯士晉為内臣」の一文がある。この「許」は「約束する」の意、「士」は「仕える」の意味で動詞である。『大漢和辭典』「士」の二十一に、「つかへる。仕に通ず」とある。「内臣」は「○外国が隸属して臣禮を執ること」の意味である。従って、この文を書き下すと「仲孫蔑を殺し、魯（国）を以て晉（国）に仕えさせ内臣になることを約束する」となる。しかし和刻本の訓点を見るとこの文は、「許<sup>ス</sup>殺<sup>シ</sup>仲<sup>ニ</sup>孫<sup>一</sup>蔑<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>魯<sup>ノ</sup>士<sup>ヲ</sup>晉<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>内<sup>中</sup>臣<sup>上</sup>」となっている。網掛け部分の訓点を誤って、原意の「魯を以て晉に仕える」を「魯の士を以て晉に」に換えた。「魯士」を名詞扱いにしている。これを受けて、後ろの「内臣」は魯国が晋国に隸属して臣禮を執ることから、魯国の人が晋国の内臣となったことになる。季吟はこの解釈を受け入れ、さらに「魯の士」を「魯士」という固有名詞にし、「仲孫蔑を、ころし。魯士と、いはるゝを、もて。晋に、内臣たるべし、など、いふことを。ゆるし、きこえだれば」と、和刻本の訓点に沿って訳している。言うまでもなく、漢語の品詞の誤解である。

紙幅の関係で和刻本の訓点に従った誤訳を、以上の五例のみ挙げることにする。指摘したごとく、誤訳は殆ど漢語の品詞を誤ったことから生じたものである。季吟も同じ解釈でそうしたのか、それとも和刻本の誤りに気づかないまま従い、誤訳となったのか、断言しがたい。また、和刻本の正しい訓点を、季吟が誤って改めた箇所も見られる。いずれにせよ、和刻本の加点者よりも漢文力が上であるとは言い難い。

## 誤訳と解釈の間

本節では和刻本の訓点にはよらず、季吟自身の解釈によつて原作と異なる意味となつた用例を挙げ、誤訳と解釈の相異の視点から見ていこう。

『古列女傳』卷之五節義傳四「楚昭越姬」の冒頭に、楚昭王が寵妃二人を連れて遊びに出かける話がある。昭王は馬車を駆つて祭祀する附社の高台に登り、我が国土を眺め、臣下が追いかけるのを見て楽しむ。「王親乗駟以馳逐、遂登附社之臺、以望雲夢之囿、觀士大夫逐者、既驩（王は自ら四頭だての馬車を操縦して（二妃の安車を）追いかける。かくて附社の臺に登り、雲夢の園を眺望し、士大夫たちが追いかけるのを見て飲む）」とある。

和刻本の訓点と季吟の訳はそれぞれ次のようである。

和刻本 王親乗駟<sup>ミ</sup>以馳逐<sup>ス</sup>遂登<sup>ニ</sup>附社<sup>ニ</sup>之臺<sup>ニ</sup>以望<sup>ニ</sup>雲夢<sup>ノ</sup>之囿<sup>ニ</sup>觀<sup>ル</sup>士大夫<sup>ヲ</sup>逐<sup>フ</sup>者<sup>ヲ</sup>既驩<sup>ニ</sup>……

季吟 王ミづから、くるまに、のりて。附社<sup>ふしや</sup>のうてなに、いたり。雲<sup>くも</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>のそのを、のぞミ。士大夫<sup>したいふ</sup>の、したひまうづるを、ミて。よろこびつゝ……

季吟の訳はやや簡単だが概ね和刻本と同じ意味である。異なるのは和刻本の「雲夢<sup>くも</sup>之臺<sup>ゆめ</sup>」の訓点を、「雲の夢のそのを」と改めたぐらいである。「雲夢」を分かりやすくしようとしたのであろうが、これは誤訳である。そもそも「雲夢」は楚国の地名で、固有名詞である。『爾雅』「釋地」に「楚有雲夢」とあり、また『文選』「高唐賦」の冒頭に「昔者楚襄王、與宋玉遊於雲夢之臺、望高唐之觀」とあるように、現在の湖北省孝感市にある。いまでも雲夢県東郊に、昭王が造営したとされる「楚王城」跡が残されている。「雲の夢」では全く異なる意味になってしまう。「雲夢」が地名であることを季吟は知らなかったのであろう。



ただし、「遂登附社之臺、以望雲夢之園」は対句となつてゐるため、「附社」と「雲夢」は同じ品詞でなければならぬ。和刻本の訓訳者はそれを知っており、そのとおりに訓点を付けた。和漢の書を熟読してゐる季吟がわざわざこれをくずして訳すには、なにか目的があつたのか、それとも対句に氣付かず、楚の地名であることも知らずにただ易しくしたのかは、不明である。いずれにせよ、原作を正しく訳してゐないことは確かである。

『古列女傳』卷之八續列女傳十九「明德馬皇后」は漢顯宗の馬皇后を主人公とする話である。生涯のエピソードがいくつ書かれ、『古列女傳』でもつとも長い話である。『假名列女傳』を見ると、季吟はばつさりと原文の約七割を切り捨て、要所のみを訳してゐる。たとえば馬皇后が太子の宮に入る箇所は、

其のち、おほやけの、えらひに、かなひて。皇后、十三のとし。太子の宮に、いりて。丞陰後の、かたはらに。つかふまつる人の、なみにて。おはしけるに。おなじほどなる、ミやづかへ人に、まじはり玉へる礼義など。よく、おさめそなへ玉へりけれバ。かミなるも。しもつかたなるも。あいなきさまに、ミえきこゆる人なくなん。かくて、つゐに、ときめき玉へること。いと、ことにて

とある。これは和刻本の、

以<sup>レ</sup>選<sup>ヲ</sup>入<sup>ニ</sup>太<sup>子</sup>ノ宮<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>年<sup>十</sup>三<sup>奉</sup>承<sup>シ</sup>陰<sup>后</sup>ニ<sup>傍</sup>接<sup>ス</sup>同<sup>一</sup>列<sup>ニ</sup>礼<sup>則</sup>脩<sup>マリ</sup>備<sup>ハレリ</sup>上<sup>下</sup>安<sup>ス</sup>之<sup>遂</sup>見<sup>ニ</sup>寵<sup>異</sup>セ

を訳したくだりである。ほぼ原本通りの訳であるが、網掛け部分の「一カ所だけは異なり」、「陰后」を「丞陰后」としてゐる。『後漢書』卷十「皇后紀第十上」を見ると、陰后は漢光武帝の皇后で太子（後の顯宗）の母である。名は陰麗華といい、謹厚儉約で、慈愛深い女性とされている。光武帝が微賤の時に彼女の美貌を知り、娶らんとして天下を得たという説さえある有名な美女である。

季吟はなぜ「陰后」を「丞陰后」としたのか。陰麗華の故事を知らなかったからであり、「奉承」を一つの単語だと思わなかったからであろう。陰麗華については、中国では「仕宦當作執金吾、娶妻當得陰麗華（官につくなら執金吾、妻をめとらば陰麗華）」

という『後漢書』の名句でよく知られているが、日本ではあまり知られてないようである。季吟も知らなかっただろう。加えて、「奉承」には「仕える、侍奉」という意味のあることも知らないようで、わざわざ和刻本の「奉承」をくずして、「承」を人名に接合した。このような訳には季吟なりの意図があるのだろうか、ここでは誤訳と見ておきたい。

『古列女傳』卷之八續列女傳二十「梁夫人媳」は漢和帝の姨、恭懷皇后の姉の話である。寶后の讒言によつて、父は獄死、母と弟は流罪となり、彼女ひとりだけ逃れて民間に潜む。寶氏一門が減びてから和帝に上書し冤罪を訴え、一族が赦されて都に戻り、榮華を極める。梁夫人の章疏に冤罪による慘状を述べるくだりがあり、その中に自身について、「獨妾脫身竄伏草野、嘗恐歿命、無由自達（ただたくしひとりが逃れ民間に潜み、常に命を落とすことを恐れ、胸中を伝えるよしもない）」とある。都に住む皇帝の親族なのに、今はさすらいの身となり田舎に隠れ住むことを余儀なくされていると歎く。この「草野」は都に對して、民間や田舎といった意味であり、具体的には文中の「媳從民間上書自訟曰」から、現在の居場所が民間であるとわかる。漢詩文ではよくある表現だが、『折たく柴の記』（一七一六頃）にも、「これ古にいほゆる草野の会也。されば、此所にて用ひられむ所はしかるべからず」とある。

この箇所は和刻本には、「獨<sup>リ</sup>妾<sup>レ</sup>脫<sup>ル</sup>身<sup>ヲ</sup>竄<sup>ニ</sup>伏<sup>ス</sup>草<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>嘗<sup>テ</sup>恐<sup>ル</sup>歿<sup>ル</sup>命<sup>ヲ</sup>無<sup>レ</sup>由<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>達<sup>ス</sup>」とある。一方、季吟の訳は、「やつかれ、ひとり、身をのがれて。野<sup>ノ</sup>べの草<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>に、かくれ、ふせりながら。命<sup>ヲ</sup>を、うしなひける身の、ありさまにて。ミづから、此むねを。あが玉<sup>ノ</sup>の、ひかりに、てらし、ミそなハしめたてまつらん、よしなからんことを、おそれ侍しに」として、実に長々と綴る。そして、「草野」を「草野」や、「民間」「田舎」とせず、「野<sup>ノ</sup>べの草<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>」と訳している。わかりやすくしようとしたのか、ともかく原文の意味を取り違えている。

『古列女傳』卷之六辨通傳十三「楚處莊姪」は、莊姪が楚頃襄王に諫言し、楚国を復興させた話である。外遊しようとする頃襄王は、途中で待ち伏せする莊姪に説得され、彼女を連れて国へ帰る。「王曰、善。命後車載之、立還反國。國門已閉、反者已定（王は、よしと言った。後の車に命じて彼女を乗せ、ただちに国へ帰る。しかし、国の城門は已に閉じられ、謀反

の情勢となつてゐる」とある。

特に難しい文ではないが、「後車」の解釈が分かれる。

和刻本 王<sup>ノ</sup>曰善<sup>シ</sup>命<sup>ヲ</sup>後車<sup>ニ</sup>載<sup>セ</sup>之立<sup>テ</sup>還<sup>リ</sup>反<sup>ル</sup>國門已<sup>ニ</sup>閉<sup>チ</sup>反<sup>テ</sup>者已<sup>ニ</sup>定<sup>マル</sup>

季吟 王、よろこび玉ひて。やがて、くるまのしりに、のせて。そこより、ひきかへして、かへり玉へりけるに。國門<sup>こくもん</sup>はや、とざして。むほんの、ともがら、すでに、さだまりたる、ありさま也。

和刻本が「後車」をそのまま音読して一つの品詞にするのに対し、季吟はそれを「くるまのしり」と訳す。「後車」はあとに続く車の意で、『懷風藻』や『十訓抄』などにも見られ、近世でも使われる。『大漢和辭典』には、「後車○そへぐるま。副車。㊦後に扈從する從者の乗る車。㊦後に續く車」とある。『辭海』は「後車】副車也」とする。一方「くるまのしり」は、小学館『古語大辭典』によると、「車の尻 牛車（ぎつしや）」の後部。また、その後方の座」である。原文の内容からみると、頃襄王が突然現れた女を自分の御車に乗せることは考えにくいので、この「後車」は副車とするべきであろう。季吟はくるまの後方の座の意としてか、莊姪を頃襄王と同じ車にしてある。当時の礼制などによると、たとえ寵妃でも王と同じ車には乗らない。前節の「齊孝孟姫」の話からもわかるように、孟姫が齊孝公に従つて外遊するときにも、それぞれ別の車に乗る。そして孟姫の車が壊れても、齊孝公は自分の車に夫人を乗せず、別の車を出して迎える。右の「楚昭越姫」の話も同様で、楚昭王が寵妃二人と出かけるさい、自らは駟馬の車に乗るが、寵妃は別の車（安車）に乗る。これを裏付けるのが卷之八續列女傳十四「班婕妤」である。話の最初に、成帝が班婕妤を誘つて同じ車に乗つて御苑へ遊びに行こうとする。しかし班婕妤はそれを断る。理由は、「賢聖之君皆有名臣在側、三代之末主乃有女嬖（賢明な君王は皆名臣が側にいる。末代の君王だけは女を側におく）」からである。季吟自身もこの文を「かしこき、ひじりの、ミかどハ。ミナ、名<sup>な</sup>たかき臣<sup>しん</sup>下<sup>か</sup>のミ、かたはらに侍りぬ。たゞ、かの三代<sup>さんだい</sup>の末<sup>すゑ</sup>の、まつりことをとろへしほどの、きミこそハ。をんなごなどを、めしぐし侍れ」と訳している。

季吟が「後車」を「くるまのしり」と訳すのは、遊び好きで国のことを顧みない頃襄王を、末代の君と考えてのことであろうか。

同じく車に関する話で、『古列女傳』卷之七孽嬖傳十二「衛二亂女」に面白い訳がある。のち衛莊公となる蒯聵は国へ戻るため、渾良夫に手引きを頼み、「報子以乗軒（もし成功したらおまえに大夫の位をやるぞ）」と約束をする。原本の「報<sup>レ</sup>子<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>乗<sup>ヲ</sup>軒<sup>ヲ</sup>」を、季吟は「なんぢを、くるまにのせて、いでいらしめ」と訳す。「軒」は、大夫の車であり、「乗軒」とは大夫の車に乗ること、つまり大夫となることである。原本の「報子以乗軒」は「軒車に乗れる大夫にすることを以てあなたに報いる」の意であり、大夫の位を与えるという約束になる。一方季吟の訳は、直接そのような意味を表してはいない。が、日本語の「くるま」は、平安時代には「牛車」をさし、貴族が乗用する。「くるまにのせて、いでいらしめ」の訳は、「牛車の宣旨」と同様、相手に高い身分を与える約束となる。だから直訳ではないが、日本の文化を踏まえたものである。

以上五例は、地名の固有名詞「雲夢」をくずした訳や、歴史人物の「陰后」を「承陰后」とした訳は明らかに誤訳と言えよう。「民間」を意味する「草野」を「野べの草葉」と訳すのも適当ではない。このような誤訳の原因は、中国の地名・人名などの固有名詞を知らずに、ひたすら難しいと思われる漢語をわかりやすい和語にやわらげることにあると考えられる。「後車」の意味は原作とは異なるが、季吟の頃襄王に対する評価を推測すると、解釈の違いになる。「乗軒」は訳語のみだと原作の意味を伝えていないように見えるが、日本の事情を参照すると、良訳とすべきであろう。

### 物語の合理性を追求して

以上、漢文の誤訳や異なる解釈例をいくつか挙げてみた。いずれも話の内容に影響するものではない。次に原作の内容や人物像が一部異なる例を二話挙げてみたい。

『古列女傳』卷之三仁智傳四「曹僖氏妻」は妻が夫に助言して、禍から逃れた話である。晋の公子重耳が国から逃れるとき、曹国を通った。曹恭公は彼を礼遇せず、その上、彼が異相あることを聞いて入浴中に覗き見る。大夫僖負羈の妻は重耳とその従者を見て夫に言う、「重耳の従者らは国相の器で間違ひなく重耳を輔佐して晋国を得る。重耳は一旦国へ帰つて国君になつたら、きっと最初に曹国を伐つだろう」と。僖は妻の話を聞き入れ、重耳に賄いなどを贈る。やがて晋に戻つた重耳は曹へ出兵したが、僖の家は戦火を免れた。

その冒頭は以下の通りで、引用文は和刻本である。

曹<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>夫<sup>ノ</sup>僖<sup>ノ</sup>負<sup>レ</sup>羈<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>妻<sup>ナリ</sup>也<sup>①</sup> 晋<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>重<sup>ノ</sup>耳<sup>ノ</sup>亡<sup>テ</sup>過<sup>ル</sup>曹<sup>ニ</sup> 恭<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>禮<sup>セ</sup>焉<sup>②</sup> 聞<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>駢<sup>ノ</sup>脅<sup>ナリ</sup> 近<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>舍<sup>ニ</sup>伺<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>將<sup>ニ</sup>浴<sup>セント</sup> 設<sup>レ</sup>帷<sup>ヲ</sup>薄<sup>シテ</sup>而<sup>レ</sup>觀<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup> 負<sup>レ</sup>羈<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>妻<sup>ナリ</sup>言<sup>フ</sup>于<sup>ニ</sup>夫<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup> 吾<sup>レ</sup>觀<sup>ニ</sup>晋<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>使<sup>ノ</sup>者<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup>皆<sup>ニ</sup>國<sup>ノ</sup>相<sup>ナリ</sup>也<sup>③</sup> …

恭公は重耳の入浴中、その一枚あばらを覗くため、帷子を立てかけ近づいて観察する。負羈の妻は夫に、晋公子の使者三人は皆国相になる者だと言う。しかし左の季吟の訳を見ると、重耳らを垣間見るのは負羈の妻となつてゐる。

曹<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>夫<sup>ノ</sup>僖<sup>ノ</sup>負<sup>レ</sup>羈<sup>カ</sup>が妻<sup>ナリ</sup>。晋<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>重<sup>ノ</sup>耳<sup>ノ</sup>、ふるさとを、にげいで、曹<sup>ノ</sup>のくにを、よぎりし時。曹<sup>ノ</sup>の恭<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>の、ふるまひ、いと、なめげになん、ありし。負<sup>レ</sup>羈<sup>カ</sup>が妻<sup>ナリ</sup>。重<sup>ノ</sup>耳<sup>ノ</sup>の、やどりに、ちかづきつゝ、其<sup>ノ</sup>ゆあ<sup>ニ</sup>ミせん、と、するころほひを、うかゞひて。とばりを、まうけて。ひそかに、彼<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>々<sup>ノ</sup>の、ありさまを、みつゝ。負<sup>レ</sup>羈<sup>カ</sup>に、かたらく。われ、晋<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>を、かいまミしに。其<sup>ノ</sup>ず<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup>。ミな、なミ<sup>ノ</sup>の、人<sup>ノ</sup>にあらず。國<sup>ノ</sup>の相<sup>ナリ</sup>なるべし…

この訳文は大きく三点が原作と異なる。①原作に重耳は「駢脅（一枚あばら）」とあるのに対し、訳文にはふれていない。②原作に恭公は帷子を立てて重耳の入浴を覗くとあるのに対し、訳文はそれを省略した。③訳文では、負羈の妻が重耳の入浴時間帯に帷子を設けて彼らを垣間見ることをあえて付加している。

なぜこのように異なつてくるのだろうか。原因は「駢脅」と「吾觀晋公子」の捉え方にあると考えられる。原作の②部は、恭公が帷子を立てて重耳を観察するくだりの後ろに、すぐ「負羈之妻言于夫曰、吾觀晋公子…」と続き、負羈の妻が夫に重

耳らを觀察したことを告げる一文となっている。話題は、恭公が重耳を覗き見ることからいきなり負羈の妻が重耳を見たことに、変えられている。前後話の関連性がなく、ややわかりにくい。季吟は話をわかりやすくしようとしたのか、この②で重耳を觀察する恭公を③のように負羈の妻に変えた。しかし原作に恭公が見たかったのは重耳の「駢脅（一枚あばら）」であり、服の上からはわからないのである。そのため恭公は重耳が入浴するさい帷子を立てて身を隠し、近づいてその裸を覗き見ることにした。無礼だが、男にしかできない。もし、負羈の妻が重耳の「駢脅」を見るとしたら、貞女（賢女）の道を踏み外すことになる。そこで季吟は①を省略して、②の恭公を負羈の妻に変え、③にしたのであろう。原作の筋と異なるが、話により合理的に運ぶための一種の創作とも言えよう。

次に、『古列女傳』卷之六辨通傳十一「齊宿瘤女」を見よう。主人公は齊の東郭に住む、頸に大きい瘤のある桑摘み女である。彼女は弁舌に巧みで、齊王を感動させ、ついにその后になった。話は齊王が外遊するとき、東郭で桑を摘んでいる宿瘤女を見かけたことに始まる。百姓たちはみな王様を見ようと集まってきたのに、宿瘤女だけは脇目もふらず一心不乱に桑を摘んでいる。それが齊王の目に止まり呼び寄せられ、筋の通った受け答えが王に気に入られて宮中へ同行せよといわれる。それに対して宿瘤女は、「頼大王之力、父母在內。使妾不受父母之教而隨大王、是奔女也。大王又安用之（大王のお陰で父母は家におります。もしわたくしが父母の教にそむいて大王について行くと、駆け落ちした女になります。こんな女なら大王になんが必要があるでしょうか）」と礼をふんで断った。すると齊王は大いに恥ずかしくなり、「寡人失之（わしのあやまちだ）」と謝る。和刻本の訓点を見ればこのやりとりが確認できる。

女「曰頼大王之力、父母在內、使妾不受父母之教而隨大王、是奔女也。大王又安用之。王大慙。  
曰寡人失之。又曰貞女、一禮不備、雖死、不從。于是王遣歸、使使者以金百鎰往聘迎之。」

網掛け部分の「頼大王之力」はただの社交辞令で、簡単に言うとお陰様での意である。宿瘤女の言いたいのは、「わたしは貞女だから、礼に則り両親に挨拶して迎えにこないと、あなたに従うことはできませんよ」ということである。貞女

が嫁ぐには男が家に迎えに来る「親迎」によらなければならない。もちろんその前に両親への挨拶や結納が必要となる。貞女は命よりも名誉が大事なので、儀礼が整わないと男の家には行けない。礼を以ての断りであるが、きちんと迎えに来てという意味を込めての返答でもある。すると齊王は自分の粗相を恥じ、素直に謝って彼女を家に帰した。その後使者を使わして結納金を贈り、正式に迎えることにした。

しかし、季吟の訳は少し異なる。

しゆくりう、申けるは。やつかれ、ちゝハゝ、うちに、ありなから。いま、おほきミの、ちからに、まかせて。ちゝハゝ、の、をしへをも、うけきこえさせず。たゞに、やつかれを。おほきミに、したがはしめ給はましかバ。これ、いはゆる、わしれるをんなに、侍らずや。さる、あやしき、わしれるものなどをしも。おほきミ、何かハ、もちひさせ玉ふべきと、申けるに、閔王、<sup>びんわう</sup>いたく、はぢ玉ひて。むへ也。わが、あやまちぞや。されど、わか、いふまゝに、したがひねと、のたまへど。しゆくりう、又、いはく。貞女は、一礼<sup>いちれい</sup>そなはらねバ、死すといふとも、したがはじとのミ申けるに。せんかたなくて、ゆるしやりつゝ。さて、ことに、つかひを、つかハし。こがね百鎰<sup>もひやくいづ</sup>を、もたせて。聘<sup>へ</sup>して、むかへしめ玉へれば：

「頼<sup>二</sup>大王<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>力<sup>二</sup>」を「おほきミの、ちからに、まかせて」と訳することによって、元のお世辞が責める言葉になってしまった。儀礼を要求する原作は、王が権力を振うことに対する反抗へと変形される。一方、王に対しては、謝りながらも、「されど、わか、いふまゝに、したがひね」と、その権勢もあらわな命令を付け加える。宿瘤女を家に帰すのも、「せんかたなくて、ゆるし」たのである。すでに原作中にある齊王の素直さがなくなっている。話の筋こそ変えていないが、人物の性格や場面の雰囲気は、おのずと原作と異なる。

それは「頼」の解釈による。和刻本はこの字に振り仮名を付けていないが、訓点通りに読めば、「大王の力に頼る、父母内に在り<sup>あ</sup>」というところであろうか。『大漢和辞典』「頼」の項に「①たよる②たより③さいはひ」の解釈にあたると思われ

る。季吟がこの字を「まかせる」と読んだのは、次の「貞女は、一礼そなはらねバ、死すといふとも、したがはじ」に関連付けてのことではないだろうか。つまり、「わか、いふまゝに、したがひね」という齊王の権力をふるう仰せに、「たとえあなたは王様であっても、貞女のわたしをもらうのに、礼が備わらないと無理です」という断固たる姿勢をアピールするためである。二人の人物像はともに原作より個性を強め、その場の雰囲気も原作より緊張感を増している。

このように季吟は必ずしも原本に従って翻訳しているのではなく、ところによって適宜自分の解釈により物語を再構成しているのである。それは物語を合理的に運んでいくためや、場の雰囲気を盛り上げようとするためであった。もちろんただの読み違いの可能性も排除できないが、話の流れを変えずに物語を合理的に運んで行く腕前には感心するところである。

### 翻訳を通して

『古列女傳』を全訳したのは、季吟の『假名列女傳』だけであるが、『古列女傳』中の話をとりあげた作品は近世の女訓物に多く見られる。もちろん取りあげる目的や参照原本は作者によってそれぞれであるため、全部翻訳とは言えない。『假名列女傳』の前後に、中江藤樹の教訓書『鑑草』（一六四七）と辻原元甫の仮名草子『女四書』（一六五六）がある。『鑑草』巻之五慈残報には「齊義継母」の話が挙げられている。前半の内容は『古列女傳』とやや異なるが、宣王に裁決を仰ぐところからはほぼ同じになる。「今皆赦之、是縱有罪也。皆殺之、是誅無辜也」にあたる文を、「罪の疑はしきを殺さんより許すには若くことあらじ」としている。<sup>(注9)</sup>意味的には原文よりも季吟の訳に近い。また、『女四書』女論語卷上学礼章第三に「孟姫之事」として、「齊孝孟姫」の話が挙げられている。それは、孟姫が孝公に従って外出するところから始まる。「孝公使駟馬立車載姫以歸」と「今立車無駟非所敢受命也」にあたる部分は、「君、きこしめし、いそぎ、車のやぶれたる、木どもをあつめて、つくるはせ。まづ、これにのりて、いそぎ、かへり給へ、と仰ければ」と「いま、つくるひたるくるま、まはらにて、



のるべきくるまに、あらず」<sup>(注10)</sup>のようになっていいる。「立車」という意味は全くみられない。しかし、原文の「安車輜輶」はそのまま「安車、輜輶といふ車の…」<sup>(安車、輜輶)</sup>としていいる。つまり、「安車」「輜輶」は車の種類と見られていいるのである。季吟の訳と併せて考えると、当時の日本では、「立車」は殆ど知られていいないのではないかと思われる。『古列女傳』の受容を通し、近世前期日本の学者の中国事情についての認識と解釈の一斑が窺われる。

以上、『假名列女傳』の原作と意味の異なる訳を、誤訳と和刻本との関係、誤訳と解釈の間、物語の合理性の三方面から見てきた。そして誤訳の原因の一部は、和刻本の訓点に従った結果であることを明らかにした。そのほとんどは漢語の品詞を誤り、動詞を名詞、名詞を動詞として訳したためである。「賜」「士」「監」「立車」などがその例である。また、和刻本の訓点によらず原作と異なる訳をするのは、単なる誤訳の場合と自分の解釈による場合とに分けられることも検証してきた。その結果、誤訳とみられるものは、難しい漢語をわかりやすい和語にやわらげようとした際、地名・人名など固有名詞を誤ったものであることがわかった。「雲夢」「陰后」などはその例である。一方、解釈による意味の違いは、季吟の内容理解や日本事情に関連して生じたものと考えられる。「諸姫」を「姫ぎミ」、「後車」を「くるまのしり」、「乗軒」を「くるまにのせて、いでいらしめ」と訳したのはその例である。語句の誤訳などとは別に、内容の一部を変える場合も分析してきた。それは物語をよりわかりやすく、合理的にするための創作と思われる。

和刻本『劉向列女傳』を底本とする季吟は、ある程度その訓点に頼っていると考えられる。原本の誤訳に気づかず、あるいはそれを知らずに援用しているのが、その証しといえよう。また、今回は挙げていないが、ところどころ難解な文章を削除する一方、原本による難しい書き下し文をしている。漢文を完全に消化しきれないためにとった方法であろう。正しい訓点をくずして誤訳となったのは、中国の地名や歴史上の人物を知らず、わかりやすさを追求した結果である。他方、原作の意味とは異なるが、日本の文化事情、もしくは物語の合理性を考慮した訳も多い。本稿では数例を挙げたのみであるが、『假名列女傳』では多数にのぼる。

『假名列女傳』の難しい訳文は、同じ季吟作とされる『女郎花物語』に至ると、わかりやすくなる。そこには翻訳から脱皮して、原作を我がものにして物語る自在さがうかがわれる。しかし一方で、『假名列女傳』と同様、原作と異なる箇所も見られる。この『假名列女傳』から『女郎花物語』への『古列女傳』の受容を、次回のテーマとしたい。

注1…野村實次『季吟本への道のり』（北村季吟古注釈集成別1）新典社、一九八三年三月。

注2…榎坂浩尚『北村季吟論考』（新典社研究叢書98）新典社、一九九六年六月。

注3…拙稿『『假名列女傳』の翻訳手法』（二松）23 二〇〇九年三月。

注4…季吟『假名列女傳』跋文。なお、『假名列女傳』の本文は『假名草子集成』第十七巻による（朝倉治彦編、東京堂出版、一九九六年三月）。

注5…青山忠一『假名草子女訓文芸の研究』桜楓社、一九八二年二月。

注6…山崎純一『列女伝 歴史を変えた女たち』五月書房、一九九一年六月。

注7…山崎純一『列女伝 上』（明治書院、一九九六年十二月）二〇〇頁の校異38によれば、四部備要『列女伝校注』（清・梁端校注）と清・蕭道管『列女伝集注』の本

文は「使朝謁夫人」となっている。

注8…本篇の「姫」について、有朋堂出版の『列女伝』（塚本哲三編、『漢文叢書』、有朋堂書店、一九二八年一月）の注に、「宮中の婦人」と解釈し、荒城孝臣氏『列女

伝』（明徳出版社、一九六九年二月）の注に、「姫 婦人の美称。また衆妾の総称」としている。山崎純一氏『列女伝 上』（明治書院、一九九六年十二月）の通釈に、「姫妾たち」となっている。また、張敬氏『列女傳今註今譯』（台湾商務印書館、一九九四年六月）の中で、「諸姫」を「各姫妾」と訳している。

注9…引用文は『婦人文庫』1教訓（上）（日本図書センター、一九八六年七月）による。

注10…引用文は『假名草子集成』第四十巻（東京堂出版、二〇〇六年九月）による。